

上黒岩岩陰の石器組成の分析

Analysis of the Composition of Stone Implements
from the Rock Shelter of Kamikuroiwa

綿貫俊一

WATANUKI Shun'ichi

はじめに

- ① 上黒岩岩陰遺跡の概要と分析資料
- ② 上黒岩岩陰出土遺物の層位的変化
- ③ 高知平野・松山平野周辺の石器・石材組成
- ④ 上黒岩岩陰遺跡出土の自然遺物
- ⑤ 上黒岩岩陰に居住した人々の領域

結論

【論文要旨】

旧石器時代後期の遊動生活から、半定住生活、定住生活へと生活・居住の形が次第に変化したのが縄文時代であるといわれている。その一方で遺物量、岩陰の狭小性などから四国山地の高原にある上黒岩岩陰のように定住的な生活の場所としての利用が考えられない遺跡もある。そこで上黒岩岩陰で具体的にどのような生活が行われ、半定住集落や定住集落が形成されていくなかで上黒岩岩陰の性格とはなにかを詳らかにするために、出土した石器と石器石材の組成について観察した。これまで定住集落を認定する際、磨石・敲石類の増加と堅穴住居・土坑などの存在に注意が払われてきた。住居・集落が固定しない旧石器時代の遊動社会・集落と違って、定住的な社会においては塩・翡翠・磨製石斧・黒曜石などで代表されるように遠隔地間の物流が活発化・安定化している。このような視点から上黒岩岩陰や周辺遺跡での遠隔地石材の比重を観察した。

石材組成の観察結果、おそくとも上黒岩岩陰6層の頃から遠隔地産石器石材の増加が窺え、以後久万高原地域の遺跡や平野部周辺でも縄文時代を通じた推定遠隔地産石材が安定的に移入されている。したがって上黒岩岩陰6層以降に定住的な社会の到来を推定し、それ以前を半定住的な段階であると考えた。

【キーワード】 石器・石材組成、半定住・定住、短期のキャンプ、生業